

総合討論

松本(司会)

僕が先ほど自己紹介を聞いた限りでは、今日は珍しいというか、ここまで分野がばらばらというのはあまり体験したことがないですね。ですので、それぞれコメントのコメントだけだと足りない感じを抱くことが当然あると思います。自分の問題関心の中で述べられて結構ですので、いかがでしょうか。

質的研究での法則定立志向の現状

伊勢田

すぐに出ないのでしたら、荒川さんがおっしゃる可能態暗示志向というのは、ほかの質的研究者の皆さんが受け入れるんだろうかという点をぜひお聞きしたいんですが。

これはある意味で研究という態度の放棄のような気がするんです。やっぱり研究としてやるからには、少なくとも個別の対象に関して明らかにする場合に、その対象について実際にそうであることを明らかにしたいんじゃないだろうかとは思うんですけども、それはいかがなんでしょうね。

松本(司会)

あくまで私の感覚ですけど、先ほど荒川さんが、岩月さんが自己紹介時に言われた問題を含めて、科学的な知見が社会に出たときにどうコントロールするかとか、どうシステムとして受け入れていくかみたいな話のときに、僕はコントロールということに懐疑的というか、そこは果たして可能なかと思うんですね。

そのときに先ほどの可能態暗示のときの、もう1つの未来予測志向ですね。未来が、例えばこういうふうにはドアのデザインをすればこういうふうには行動するんじゃないか

というところをデザインしてしまうということですよ。それが果たして可能なのか。もちろん可能な部分もある、当然。さっき伊勢田さんが言われたように、質的でないところというふうにはできないところがあるだろうということと同じように、例えばこうやって引くドアを作って、それでいきなりぶん殴る人ってそんなにいないですよ。やはり何かガチャガチャとしようとしたり、押そうとしたり引こうとしたり、ある程度それは可能性の限られた中なので、ある範囲に関しては未来予測という研究は成り立つんだと思うんです。

ただ、やっぱりそうではないというか、先ほど小説なのかという批判もありましたけど、そこは僕自身が高齢者と3年、4年とお付き合いして、そこで僕しか見えないという事象を それはちょっと言い切るんですけど、ある意味開き直りで そういった事象を提示して、それで皆さん何か通底するものを感じますかというところに投げ出しちゃうんですね、ある部分。でも、そうとしか伝えようがないというか。

先ほど、(～さんが)モデルが大事だと言いましたけど、僕はちょっとそこをまだ保留したいところで、モデルにしちゃうと非常になんかまさに質感みたいなものを落としてしまう範囲があって、モデルや未来予測志向という枠組みですくい取れないというか、何か伝えきれないような感覚があるというふうに僕は思っていて、それを捉えるときに広く質的研究といわれる分野にいるわけです。

それで話を戻すと、荒川さんの可能態暗示志向という表現では、小説も含まれるでしょうし、先ほど(岩月さんの自己紹介時の質問に対する返答として)私が言った自分の恋愛話を誰かにするというのも多分含まれるんだと思いますし、それと先ほど話した私の研究のスタイル、長々付き合っただけでそうとしか思えない感覚というのを表現すること、それも多分、可能態暗示志向というのに含まれちゃうんだと思うんです。ただし、そういうアプローチじゃないと伝えられないことがあるだろうと思います。

けれど、さっき荒川さんに問いましたけど、小説と同じだというふうに私はまだ言い切れない。そこはやっぱり丁寧に考えていかないと、それはすごく威勢はいいんですけど、それはどうなのかと思っています。

荒川

今の松本さんの説明に、別の角度から1点加えさせてください。「Fiction」という言葉の意味をO E D(Oxford English Dictionary)で調べると、現実の型みたいな意味があったんですね。つまりフィクションというのはまったく無いところから産まれるものじゃなく

て、ある種のいくつかの認識の型が組み合わせた中でできてくるものだと考えることができると思うのです。そのときに、その人の世界観なり、現実とは反する世界観ということもあるでしょうけれども、そういう認識を反映していると考えられる。それなら、それはそれで1つの知識の形態としてありうるだろうと思うのです。

これに関してもう少し補足すれば、極言すればフィクションや小説と呼ばれてもいいのですが、実際と矛盾しない範囲で・・・という条件で考えています。いくつかの点(「実際」に「観測」された「現象」)をどう結んで説明するかと考えたときに、従来の研究者は、その業界でその時代にまかり通っているそれっぽい説明をつけるわけですが、それも本質的には小説であり、フィクションであるはずなのですが、本人たちはそう思っていない。それはそれで問題だと思っていますが。そうではない方法として、それらの点の(その業界でその時代にまかり通っているそれっぽい説明とは)異なる説明をつける努力をするということもある段階では必要だと思っています。

ただし、先ほど伊勢田先生がおっしゃったように、それはどういうふうな立場で書かれたものかというのを明らかにするというのが必要だろうと思います。それは質的研究でも一緒に、できるだけ意地悪な見方で見たということと、この人はこう考えているだろうと思って見たというのはやっぱり違うでしょうから、質的研究でどういうふうな立場で描いたのかというのを明らかにしなくちゃいけないということが近年言われているのと同レベルの話だと思っています。

松本(司会)

フィクションというの、その人(書き手)の何かしらの連鎖がそこに入り込んでいる。どうでしょう？

知識の伝わり方の自律性

村上

荒川さんは、小説であることを明示すれば小説であっても問題ないという意見だと思うのですが、僕の発表した中にも、それと関連することがちょっとあったと思うんですね。というのは、僕の立場としては、どうしても知識は「使える」とか「一般化できる」

とか「真実である」とか、そういったことを重視してしまうので、僕らがいくら小説だからとか何かいろいろ札を貼って渡しても、結局その札は剥がれちゃうような気がするんですね。

だから僕が今日、運の話をして、ある人がどこかで少しだけ聞いて面白い話だと思うと、それが、「実は人生の運ってこんなだよ」というように、まるで「運」が真実であるという話であったかのような伝わり方をしてしまうこともあると思うんですね。だからその伝え方って非常に難しい気がするんです。

家島(京都大学)

今の村上さんのお話だと、要するにいくら僕が、「これはフィクションです」、あるいは「この研究にはこういう限定があります」と言っても、むしろその問題ではなくて、(サトウ先生が研究しているような)噂の広がり方とか、そういうところに問題があるから、ここで話してもあまり意味がないという感じに聞こえてしまったんですけど、そもそも、科学のことを話すときと、そういう知見が伝わるというときのことは一緒に考えていいのか、別にしたほうがいいのかと、もう一度整理して欲しいと思います。なぜなら科学というときに、僕はやっぱりテレビが見れるとか医療がどうかというレベルで考えてしまうので、科学者の研究が役に立つといっても、間接的に役に立っているわけじゃないですか。要するに僕は物理学とか全然知らないですけどテレビが見れる。それは確かに科学の恩恵を受けているんですけど、そういう、間接的な一知見の利益を得るということと、心理学の知見のように「こういう人はこうしやすよね」というようにダイレクトに知見を得るときというのは伝わり方としては違う気がするんで、その辺が一緒に議論されていて、混乱しているので、その辺を整理していただきたいなと思います。

村上

結局、技術とかというのは、それが理解できなくても使えるわけですよ。でも、心理学の知見には素人理論みたいなものがあって、合致していると使うんだと思うんですよ。

家島

そうですね、要するに信じる信じないのレベルなわけです。

村上

もしかしたら合致していなくても使うのかもしれないですね。科学者が出したものという、それが理由で流通してしまうんですかね。

研究者の知識生産とその責任

伊勢田

でも心理学の使い方はそれだけではなくて、マニュアルを作ったりとか、そういうところでも使えますね。この間私が行ってきた学会で尋問の倫理みたいな話があって、そこで心理学者がどういう貢献をしているかと、ストックホルム症候群を人為的に引き起こす実験とかやってて、それを尋問のマニュアルに組み込むわけですね。そうすると非常に有効に尋問ができるというような、これは心理学者の倫理の問題です、というような話をしていたんですけど。

それは素人理論に組み込む、組み込まないというのとちょっと別のレベルで、結構危険な扱い方もできるということがある。逆に、場合によっては変な心理学理論を使ってしまったために、本来きちんと効力を発揮しなければいけないはずのマニュアルがうまく使えなかったというような、事故が起きたときに作業マニュアルを見てみたら、どう考えても非常に非現実的なマニュアルだったみたいな、そういうこともあるんですね。それは両方起きると思います。

松本(司会)

私は1カ月ぐらい前に原子力の関係の先生とお話をしていて、科学者というのはニュートラルというか、いわゆる無色だというふうに、教授で結構な先生なんですけど普通に言うんですね。僕はそれは困ったなと思いながら・・・原子力に手を染めている、僕は原子力がすべて悪いと思っていなくて、それは必要とされてそれをしてるところもあるんでしょうから、本当に両輪だろうと思ってます。悪人だと言うつもりはないんですけど、ただ、作った時点でそれは何かしらに關与していることは確かで、ニュートラルもしくは真っ白だなんて言い方は到底できないだろうと言い出したんですけど、なかなか了解していただけませんでした。あくまでそれは政治の問題だと言われるんです。

それと同じように、今言われた心理学の知見も間接的なので、「いや、どうなるかわかりません」みたいな話で済ませると、ある意味では責任をどうするのかと思います。一方で例えば論文を書いたことその人がすべて責任を取れるか、裁判を起こされてすべて責任を負わすべきかということ、確かにそれはちょっと無茶な話のような気もするんですけど、一方で「どうなるかわかりません」と言うのもどうか。その、どうでしょうね、狭間というか、どう考えなきゃいけないのかなと思いながら聞いていましたけど。

家島

それを解決するとき科学の使い方みたいなのもっと整理すべきなのか、それとも提供する時点でもう既にテレビができましたみたいなかたちで、技術だけで提供するのか。

フィードバックの重要性

伊勢田

フィードバックが必要なんですよ。使われている状況をよく見て、フィードバックを経て修正をかけてやるような社会的なプロセスが必要です。

サトウ

あと、使い方論に関して言うと、僕は、悪意で何かする人はあまりいない、みんな善意でやってると思うべきだと思うんだよね。善意の結果として、どういう好ましくない結果が起きたのかということが非常に重要なのです。知能検査の歴史なんかはそういう意味で良い例で、みんな「知能が捉えられたら良いだろう」、「それが数値になったら便利だろう」、「IQという形で捉えられるようになったら便利だろう」、「子どもだけじゃなくて大人もできるようになったら便利だろう」、「アメリカで人が増えちゃったから移民を制限できたら便利だろう」、「頭が悪い人は子どもを産まなかったら便利だろうからやはり事後的でも中絶をするのがいいだろう」というふうに考えて「善意」でやっている。ある基準から見たら善意と見えないということは分かりますが、岡目八目の批判はここでは問題ではない。当人が善意でやってるということを前提に考えないと、結果的な悪なるものはなくならないと思います。

また、何か発覚したときには、こういった悪い奴だったから悪かったんだという形で個人の責任に帰しておけば済むのかな？という感じはやはり持っているので、善意としてやったことが悪として認められた場合、なぜそういうことが起きたのか、悪い人だから悪かったというような形とは違う事後検証のようなものを仕組みとして組み込むのが重要だろうと思っているんです。緩い話ですけどね。

松本(司会)

話が拡散しますが、私は環境と高齢者の関係というテーマを持っていて、その分野にPOE (Post-Occupancy Evaluation) という考え方があります。いわゆる家を買って住んだ後に住み心地を評価するという方法があって、それが家の評価になるわけです。そういうPOEという方法があって、それはすごく良いと言われるんですけど、ほとんど進まないんですよ。

例えば建築の雑誌とか見ていただくと気づかれると思いますが、一番初めが一番きれいな家の写真を人を入れずに撮るんですよ。人が住んだ後というのは考えない、そういう美的な縛りというか、そういうものを信じているところがあって。家電にしてもそうですけど事後的のことというのを・・・どうですか。

サトウ

私が言っている事後的はもっと腰が引けた事後的で、利害関係者が生きているときは無理なんですね。僕は歴史研究もしていますが、自分の指導教員が教えを受けた人(自分にとっての先生の先生)の歴史を書こうと思ったらそれは無理なんですね。だけでも無理だからといってずっとやらないわけにもいかないというのが1つ。

あともう1つは話がずれてしまうけれども、歴史にならないと判断できないというだけじゃ弱いスピードに欠けて世間のニーズに応えられない。その意味で原理的判定というのはあり得るべきだと思います。それはどういうことかと言うと、これは血液型性格判断の話ですけれども、血液型性格判断が正しくないという話をするときに、総合的に判断するしかないわけです。そして、総合的に判断して理屈上は駄目だというふうに言い続ける人がいるということが大事なんだろうと思います。

お配りした新聞記事なんか、結局、取材にどれだけ協力しても「1年間に70本テレビ番組があった」としか引用されてないという間抜けなことになっていますけれども、重要なのは、70本、血液型番組を録画し続けるということなんです。番組の中で、どういう根拠で血液型性格判断が正しいと言っているのかというのを見続ける。それによって、誰かから意見を求められたら、1年間に放映された番組をすべて確認したが、血液型性格判断は正しくないという考えを変更するに至る根拠はなかったですよということを言うことができるんです。そういうことを言う人が必要なんです。これはもちろんテレビ局なんかは全然相手にされなかったわけですが、そういう意味では利害関係者がいては、歴史的なものでなければ(今起きていることであれば)原理的に議論する。

原理をしっかりと立てておいて、理論の否定とは何かという理屈を立てておいて、誰かに、血液型で人を見たり、血液型でクラスを作るということになぜ反対するんですかと言われたときに理由を言えるということが重要ですね。原理的思考と歴史的な反省、重要なのはそういうことではないかと思います。

松本(司会)

それはやり続けることに研究者の尊厳みたいな……。

サトウ

尊厳とまでは言いませんが、重要な役割だと思います。私の予言でいくと、あと10年後に血液型性格判断がまた流行りますから、10年後もまた取材が来るんだろうなと思います。私のホームページを見ていただければ分かりますけど、これは10年ごとに周期的に流行ってる現象ですし、それを追いつけていると、なぜそうなのかということもだいたい分かるわけです。

知識の繋げ方

岩月

話が全然ズレるのですが、荒川さんの今日のお話だと、かなり個別的というか、可能性を示すようなナラティブだったら何でもいいみたいな感じに僕は受け取りました。私は、科学と言わなくても学問として考えたときに、素朴かもしれないですけど、ある程度知識を蓄積するというのは重要なことだと思います。その蓄積をしていく上で前の研究との接続というのが必要になると思うんですね。

接続するためには、自分の研究対象に対して、ある程度のカテゴライズとか概念化をして、前の人はこのことに関してこういうことを言ってたけど、私は同じカテゴリーに関してこういうことをやりますみたいなことをして、やっぱり繋げる必要があると思うんです。だから、普遍的に完全に一般化しちゃう必要はないと思うんですけど、小説という形式は僕の感覚ではまずくて、ある程度蓄積できるための概念を作って、それに基づいてちょっとずつやっていくというのは必要なことだと思うんですけど、どう思われますか。

荒川

おっしゃることはすごくよく分かりますし、かなり重要なところを突いていただいていると思います。多分今の心理学の質的研究は、その問題に瀕していると思います。というのは同じフィールドのあることについて論文を書くと、他の人がそのフィールドでもう1本論文を書くというのが、かなり難しいという流れがあるように思うんですね。結局、将来にどんどん蓄積をしていくというのは、ある種の真実、同じものを見ているというのが前提にあるんですけれども、多くの質的研究が立っているような社会構成的な視点、つまり見る人によっても違うし、そこにある関係性によっても見えるものは違うという立場の場合には、蓄積というのが非常に難しいのではないかと考えています。ある現象をある人が報告し、同じ「カテゴリ」の対象について、別の人、別の現象を発見したとしても反駁にはならないこともあるんです。

社会学でのことはよく分からないんですけれども、心理学がこの5年以内に抱える問題として、どうやって複数の研究の知見を束ねていくのかというのがあると思います。その1つとして、研究を真実に近づいていく1本の筋としてではなく、ウェブのような知識感として捉えてもいいのかなと私は考えています。

つまりいろんな研究知見にタグが付いていて、あることについて関心を持って一つのキーワードを引っ張ると、関連しそうなものが適合度順にふわっと引っ掛かってくるような知識の蓄積観、論文的な合理的な組み合わせではないにしても、参照して関係性を示すことができるぐらいの知識観でもありなのかなと考えております。

おっしゃるような問題のカテゴリ化は、現実的には結構難しいのかなというのが僕の実感です。それは他の方は違うかもしれませんので、他の方にも意見を伺いたいところです。どうでしょうか、松本さん？

松本(司会)

そうですね。僕はさっきから話すように、じゃあどうするかという話はちょっと後で置いておくとしても、蓄積とか接続とかということがすごく足かせになっているんだと思うんですね、ある意味では。

確かに私は小説でいいのかという点はちょっと置いておきますけど、例えば今ここで岩月さんと話しているこの感じとか、これは明日になったら違う感じになるでしょうし、場所が違えば違う感じになるでしょうし、そういう感じというのは確かにいわゆるこの感じを、ある本とかある知見を読んで、「あ、この感じをすごく説明している」っ

て、そういう推定するものがある、そういう繋がり方というのは当然あるし、それはすごく大事にするべきだと思うんです。実際僕もフィールドワークをやっていますが、研究書も多く読むようにしているので、そこをまったく無視しているわけじゃないんですけど。ただ、非常に素朴に蓄積していくとか、それが接続していくという形の、直接接続していくようなところを一旦置いときたいなという感じがするんです。「それじゃどうするの、松本さんの学問観はどうするの」と言われるとすごく困ることは困るんですけど。

文献を読んですごく感じるものが多かった人に対しては感じるものが多かったと伝えますし、それをできるだけ自分の言葉で、解釈ですけど引用するようにしますし、その連鎖というか繋がり方がどういうふうに理解していいだろうと思うところが実際のところですね。直接的に蓄積していくというのはちょっと僕は素朴的過ぎるかなと思います、でも村上さんがさっき言われた間接的にそれが影響し合うというふうに、そこで留まるのもどうかと思うところもありますし。

岩月

同じことを研究してますみたいな、そういうのは要らないと思われませんか。

松本(司会)

レビューはちゃんとしますよ。

岩月

そうですね。だから個々の研究で明らかにされるのは個々の事象の非常に特殊的な、経験的な現れというか、現象であるかもしれないですけど、やっぱり何らかの対象に関してみんなでちょっとずつ明らかにしていってるみたいな感覚というのはあるんですか？

荒川

それは1つのものに対するいろんな可能性を増やしていく、見方の可能性を増やしていくというふうに僕は解釈しています。

松本(司会)

そこは多分私と荒川さんとは絶対に違うところなんですけど、僕はいわゆるニュートラルに複数いるという感覚があんまり無いというか。あるものを見たときに、複数のニュートラルなA、B、Cさんがいて、それぞれの見方が提出されましたという話ではなくて、なんかもっとドロドロした感じというか。

岩月

僕も別に個々のA、B、Cさんがニュートラルである必要はないと思っているんですけど、そのA、B、Cさんがある同じ何らかのことに書いて書いたものを他の人が読むことによって、ある対象に関してさらに知識が得られたというか、そのA、B、Cさんが対象にしていたものに関してもうちょっと明らかになったような感覚というのはあると思うんですけど。

松本(司会)

対象という言い方が多分ちょっと問題があるように思える。例えば私が高齢者の研究をしていますよね。それでA、B、Cさんが高齢者のある行動に関して見て、それを理解が進んだとかという形に、そういう伝え方というのがあるんだと思うんですけど。おばあさんでもいろんなおばあさんがいますよね。ですからこのおばあさんに関してはこういうふうに理解できるという、そういう理解ではなくて、例えば私の書いたものを読んで、岩月さんが自分のおばあさんと会っているときに、「この感覚が松本さんが言ったことだ」みたいな感じのつながり方。だから対象を理解したのじゃなくて、私が提示した何かエッセンスを・・・。

岩月

それを僕も経験するということですね。

松本(司会)

同じじゃないかもしれない。私が言いたいことはかなり曲解してるかもしれない。そういう可能性は当然あるんですけど、それにしても何かそこにインプリケーションがあったというところが重要なのかなと思っているんです。

荒川

なんかメタファーになる素材が増えるみたいな感じだと思うんですね。何も無いよりはある種の視点みたいなもの、視点というところすごく固着してしまいますけれども、語る言葉が増えるという感じ、イメージとして直接的ではないですけど。

サトウ

今、松本さんが言ったことは、対象と研究者を切断はしないということですね。

今までの心理学でいくと、対象を研究者から可能な限り分離して、それを何らかの概念で捉えて、うまく捉えられれば「この概念でいける！」みたいな感じのことを考えるんだけど、松本さんの場合はそうではなくて常に刹那的で相即的。ある人とある人が会

ったときのこの感じというのを、研究者として言葉にして書いている。それによって、それを読んだ人が、 - 別にお年寄りと会っているときじゃなくて猫をなでているときでもいいだろうし、どんな時でもいいんだけど - 、自分の生活の中でかけがえのない体験が蓄積されていくような、そういう在り方を目指すのが望ましい姿勢、1つの在り方なんだらうというふうに言っているんだらうなと思って、それはやっぱり非常に丁寧で良心的だと思いますね。

僕は松本さんたちに比べると本当にモダニストで、いい概念を自分で作れると、ああいいじゃんとか面白いじゃんとかと思うほうだし、他の人の研究でも、切れ味のいい概念で説明しているのを読むと「おお、良いじゃん」「その概念って他にも使えるよね」とかっていうふうに思うんだよね。

何のために研究するのか？

岩月

今、サトウ先生が知識と言われたんですけど、今の話を聞いていて、松本さんは科学というのとは違うものを指向しているような感じを受けるんですが、そこら辺はどうなんですか。伊勢田先生のまとめだと、科学はまとめられた知識の認識論的な批判という話として出てきたんですけど、何か知りたくてやっているのか、何かを明らかにしたいとか、何かを知りたいという感じでやっているのか、もう一步聞きたいんですけど。

僕らの感覚だと、科学というのは集団の営みという素朴な感覚があって、みんなで一緒になってやっていくみたいな感じがあると思うんですけど、松本さんの、またこれもちょっとまとめとしておかしいかもしれないんですけど、言っちゃえば自分でやっているだけで全然OKな感じをちょっと受けるんですよ。その2点はどうですか。

サトウ

今のポイントは、いいポイントです。ただ、科学を目指している心理学が科学かっていうと、それがそもそも疑似科学だという問題も考えなければいけないです。言っちゃえば全然OKみたいな研究は多いですよ。実際、追試する必要ない領域も多いです。これは非常に特殊な領域だと思いますね。

例えば医療とか生物では世界中の人が追試しているわけだよね。だからデータのねつ造って問題になるわけだけれども、心理学の領域ってそういうことをしないから、「この人がこういう研究をやってんのね」で、これこそ、その「結論」を信じるかどうかなんだよね。

例えばバートという人の非常に有名なねつ造があったんだけど、ねつ造が分かるまで同じ研究をした人など殆どいなくて、追試も何もなくて、ただ信じますよというだけだったんです。そういう意味で、そういう（追試しない）という姿勢が極端になったような立場、ある人がある人と接したときに生まれる経験そのものが学問的な言葉でも書かれている、それはそれでいいじゃん！というようなことだと思います。

松本(司会)

さきほどの岩月さんの質問についてですが、知りたいのかという話と集団的な営みだろうという話ですけど、私は知りたいんだと思っています。何が知りたいのかというと、例えば岩月さんが町中できれいな女の人にドキッとするとき、へたをしたら好きになると、その出来事を考えざるを得なくなる、そのときの体験って自分としてはすごく大事ですよ。ひょっとして、その後その女の人とうまくいかもしれない。そのときのハッピーな感じを他者にすごくそれが自分にとって大事だと伝えたいのだけれど、それは「あれ、誰も表現してないじゃないか」と思う。それをうまく自分の、少なくともこの感覚に添う形で・・・

伊勢田

小説だ。

松本(司会)

荒川さんが「同じフィールドを何人が共有して」と言っていましたけど、私は同じフィールドを共有できない事情があって。私は高齢者の方と長く付き合うのでお付き合いしている高齢者の多くは亡くなってしまいうんですよね、最後は。その方にとって何が大事か、大切かということを私はずっと知りたいわけですけど、知りたいというのは結局多分それは何か私のニーズがあって知りたいんだと思うんですけど、大切なことを知りたい知りたいと思ってずっと、ある意味ではしつこく通っているわけです。

それで今も私は(フィールドワークをしている)福岡にずっと通っています。労力も惜しまず通っていて、ある論文を書いた時期が終わりとかではなくて、ある意味ではしつこく本当にその人にとって何が大事なのかということを見続けるというか、それ

をやり続ける、考え続けるみたいなことを指向しているんだと思うんです。

それは多分先ほど言われた勘みたいなことというか、勘というのと私がさっき質感とか大切なこととか、そういうことを掴もうとしていて、それから小説と同じじゃないかということへの1つの返答として、研究者としてしつこくというか、ずっと、あまり浮気をせずにはやるという点があるかなと。小説家でもそういう人はいますけどね。しつこく同じテーマを書く人。それをしたいなと思いますけど、でも少なくとも私が周りを見る限り、すごく特殊な態度だなと思っています。

研究対象の同一性の維持の問題

岩月

お話を聞いていて、今回の企画のテーマが、質的研究は、科学になり得るかという話だったので、お話を聞いてちょっと疑問に思ったのが、今言われた恋心とか感覚とおっしゃったその対象ですね。そこから対象をどうやって同一性を維持して蓄積していくかという話がメインになったと思うんですけど、社会学だと対象の問題はある種文脈ですね、社会的文脈の中で確定されるから、そこで一応なんとかフィールドワークするなり、社会学的な何か、質的研究をするときにも文脈を書いて、それで同じようなことをやっていけばその知見を先行研究から持ってきたりとかする。

でも今の話だと、サトウ先生がおっしゃったように研究者と対象との間の感覚という形で1個同一性ができるし、あるいは感覚、さっき松本さんがおっしゃった、「この人が言っていたのはこれと同じかも」みたいなところで確定するやり方というふうにおっしゃったんですけど、いろいろなやり方が結構あって、そうすると何でもありというふうに聞こえてしまうんですね。社会学は文脈を書いていけばいいじゃないかみたいなところで1つ担保にしているのだから、だからいくつもやり方があると、これもあっていいのかなみたいに聞こえてしまうんです。

松本(司会)

社会学でいったら高齢者研究で天田さんという方が立命館大学にいらっしゃいますが、先日天田さんとある学会のセッションで一緒にさせていただきました。天田さんと

私は高齢者をしつこく見ているほうだと思いますけど、やっぱり天田さんは社会的なシステムとか制度とか、社会という広い文脈もあるし、施設内の文脈ということも、そこに論点を帰属させてしまうところがあるかなと。一方で私は私で個人的なことを書き過ぎているとは言われます。

そこはフォーカスが違うということで、何でもありという話ではない。やっぱりそれぞれそこでこういうふうに切ったら・・・切ったらという言い方はよくないのかな、フォーカスを当てたらうまく、天田さんの場合だとその現場を変えたいとか、制度を変えたいという目的があってやってるんだと思うんですけど、私はあまりそこに主眼がなく、制度云々ではなく大切なことがあるのだという点に注目していて、ある意味とても心理学的だと自分では思っていますけど、そこを提示しようとしている。

Aさん

方法論としてある患者さんとの間で生まれた関係性の中で対象を設定するというやり方もあれば、先行研究の人が書いたものの中で、同じようなものを見つけて、これと同じだというふうに参照しながら書いたりして対象設定するというように、いろいろやり方があるわけですね。方法論として、ではどういうふうにするのかというのは迷ってしまったりすることもあるけど、いろいろ多様性はあるにしても、そこに書けるものの中に社会学とは違うもので書けるものがあるんだという確信があるということなんですね？

それで科学といったときに、対象をどう設定するのはすごい大事になってくるんじゃないかなと思ったのでちょっと聞きたかったんですけど、伊勢田さんはその辺をどう考えられますか？

研究対象の同一性と他の研究との議論の可能性

伊勢田

1 つ大事なものは、例えば松本さんが「この方にとってはこんなことが大事ですよ」と言ったときに、誰か質問者が来て、「いやいや、その人はこれが大事だと思っていますよ」って、それに対してチャレンジしたときに、その間で何かちゃんとした会話が成り

立つのか、ちゃんとした検討は成り立つのかというのがあるんですけど。それが成り立つのであれば、それはちゃんとした方法論があるんだろうし、成り立たないのであればそれは小説なんですけど、どうでしょう？

家島

科学というときに役立つか役に立たないかという極と、伊勢田さんがおっしゃったみたいに方法論として適切か、方法が適切じゃないかで何かという極と2つあると思います。

伊勢田

それはやっぱり後者の方法論として考えるべきだと私は思います。役に立つかどうかは二の次で。

サトウ

根拠付けということですね。

フロアCさん

根拠付けですよ、ある人はこっちから言って、他の人は、別のところから言って、両方根拠があって、違いますねということになってもいいだろうし。

伊勢田

それが同じものの別の側面で済めばそれでいいんですけども、もっと方向的に矛盾したことを言って、「いや、お前はあの人のことを全然分かってない」というような対立になったときに、ちゃんと何か解決する方法があるのかということですね。

松本(司会)

例えば・・・え～っと・・・開いているつもりってありますよね。人から「彼女はこういうところもある」とか、「松本さんはそう言ってるけど、彼女は不活発な方だ」とか、「わがままだ」とか言われると、「そうか～」と思いますけど。

僕はすごく個人的なことを書いてますし、それが社会に役立つとか社会に開かれているのかと言われると、そこはちょっと自分では答えにくいんですけど。ただ、例えば夫婦間の話とか、私と高齢者との2人の関係などはすごく個人的なことであって、そうとしか書けない。それが何か響くというか、そういう形でしか波及し得ないんじゃないのかなと。ある意味、社会的に初めから開くという態度で記述してしまうと、それはそれでちょっとずれてしまってるというか、スタンスが違うのかなと思っているんですけどね。

Bさん

今の点に関して質問なんですけど、松本先生が松本先生自体を測定器具として使っていて、話を聞いていると、結構松本先生の生育史というか、実家のおばあちゃんとか家族の思い出とか育ち方とかがあって、多分僕が研究者だとまったく違う感じになるので、松本先生を研究する人が必要なのかなと思う。

松本(司会)

実際、ある臨床心理学の先生からこのような研究にはスーパービジョンが必要じゃないかと言われたことがあるんです。その先生は冗談で言ったのかもしれませんが、

伊勢田

松本さんは例えば自分を研究対象にしている人について、誰か全然その人と会ったこともない人が松本さんの論文を読んだだけで、この人はこういう人なんだと言ってすごい対立する理論を立てたりすると、それは、「いや、お前の言ってることは間違ってる」と言いたくなりますよね。

松本(司会)

間違っているとは言わないですけど、「そう簡単に分かれた気分になっちゃうと・・・」と思うときはある(と思います)。

伊勢田

ですよね。それはやっぱり測定器としての優秀性とはまた別のレベルで、学問的な信頼性みたいなものが、そこにレベルの差があるんじゃないですか。

松本(司会)

「もうちょっと丁寧に」と思っちゃうところは確かにありますね。でもそれはどうですか。本を書いている人はテキストの読まれ方とかいう感覚ってないですか。「伊勢田さん、こういうことを書いていましたね」と言われたら。いや、もうちょっと丁寧に読んでくれと思ったり・・・。

伊勢田

それはある程度客観的に処理できるレベルなんです。文献読み取りに関する客観的な、公共的な言説の共有の場というのはあるわけですけども、松本さんはどうもパーソナルにしようとしているんだけれども、そこまでいかなくてもいいんじゃないのという気が私はするわけです。

まとめ

松本(司会)

すみません、私がメインじゃないのに。

荒川

多分この話題提供を含めた3人の中で一番質的研究をしているのは松本さんなんですよ。という意味でメインだと思います。

サトウ

会自体が松本さんの音頭で行われているんだから、それでいいですよ。松本さんとみんなの相即的な関係を味わう、ということで(いいんです)。

松本(司会)

時間になりましたのであれなんですけど・・・本当に質的研究は、私は今日多少今粘ったつもりでいるんですけど、やっぱり議論が深まってないんだと思うんです、正直な話。それぞれがどういうポジションにいるかということもあまり理解してないし、そこはすごく私はいたたまれないというか、ある意味では外部から突っ込まれたときに全然駄目だなと思ってるところで。

ですので、それぞれ今日話題提供した村上さんや我々(荒川、松本)にしても立場は全然違うんですけど、しっかり考えていただいているので、私としては対話としてはありがたいと思っています。今日もこういう会を企画して、お2人(サトウさん、伊勢田さん)に来ていただいて、皆さんにも来ていただいて、これで良かったのか分かりませんが、時間が来ていますのでこちら辺で終了したいと思います。

何か言いたいことがあったら、終わった後で個人的に言ってください。

それでは終わります。ありがとうございました。